

一八九〇年頃に『芸備医事』に掲載されたことが明らかになっていて興味深い。本書も指摘するように、これらの写真群は今後医学史をはじめとする様々な領域の研究資料として利用されうる可能性を秘めているだろう。

ただ、もし読者が本書を研究資料として利用するとすれば、もう少し資料に関する情報の提供を必要とするであろう。たとえば写真が納められていた桐箱を、口絵にカラー写真で掲載しているが、斜め上から撮影されているために、資料の原所蔵者に関する情報が書かれた箱書きが判読できない。収録写真の選択についても、たくさんの写真の中から、今回のような基準で一四〇枚近くを選んだのか説明がほしい。また病名の裏書きがある写真については、是非それを記載して頂きたかった。固有名詞に漢字併記がないのも、自分で更に調べたい読者には不都合である。これらの問題は海外出版という条件下で生じたことからあろうが、残念に思われる。写真の説明で、気になる点もあった。黒縹子の襟のついた着物を根拠に、少女の写真を娼婦としているが、黒縹子の襟は庶民一般に普及していた汚れ防止のための襟カバーであって、娼婦特有の風俗ではない。

いずれにせよ、本コレクションの本格的な分析はこれからであろうと思われる。今後編者達がどのような研究を展開されるのか、その成果を待ちたい。

(鈴木 則子)

奥沢康生・園田真也 共編著
『眼科医家人名辞書』

奥沢先生は馬力の人である。お仕事も早く、既に眼科領域だけでなく他の方面に互っても多くの著書、著述を残しておられる。お忙しい家業の眼科診療もお在りなのに何時資料を集め執筆されるのかと、不思議に思ったものだった。日本眼科学会百周年記念誌を発刊することになり、その編集員の一人に私も加えて頂き、奥沢先生とご一緒に仕事するようになり、お付き合いが始まったわけだが、何時も頭にあったのは先生の執筆時間だった。そして今回の寝耳に水の『眼科医家人名辞書』の発刊である。今回は新進気鋭の園田先生のお手伝いもあったとか、早速求めて一読さらに再度読み直して見た。「人名辞書とあるが、人名を通して幕末明治の眼科通史としての理解にも役立つ内容」と言うのが私の実際の感想である。緒言に、本著は大叔父竹岡友三著「医家人名辞書」に習って稿を起したと述べられているが、内容は竹岡著書を越える詳細さで、文章もこなれていて飽きさせない。日本眼科学会百周年記念誌第五巻「日本眼科を支えた明治の人々」と重複する部分もあるが、内容的には更に充実したものになっている。

取り上げられた人物は江戸期から幕末、明治初期に眼科専門医として眼疾患のみを診た医師あるいは眼科専業でなく内科、外科を専業としながらもブライマリーケアとして、眼

疾患患者を診た人々を、地方の郷土史、地方医史を始め、人名辞典、人物誌などから集めた四七四名が集録され、略歴、業績などが記述され、各項の終わりにはそれぞれに参考文献が記載されていて後の検索に便利である。また当時活躍した外人ウイリス、シーボルト、シュルツェ、ヘボン、ボードイン、ボンベ、マンスフェルトら二十二名が含まれている。主要眼科医家(三十二)については必要に応じて家系図、眼科系譜、碑文、墓碑銘、文書も記載されており、また流派、門人録についても詳述されている点は他に類を見ないところであらう。

付録として明眼院馬嶋流眼科の詳細が二十二ページにわたって述べられているのは圧巻である。その他、詳細な江戸時代眼科流派(一四九)一覧表(二十九ページ)が付けられていて、読者には益するところ大なるものがあると思う。会員の方々の一読を望むものである。

(山之内外一)

[思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五―七五一―一七八一、二〇〇六年十月十日発行、A五判、二九六頁、定価四二〇〇円・税込み]